

TENOHASI

てのはし

地球と隣のはっぴい空間・池袋

会報誌第27号 2013年12月21日発行



夏祭り慰霊祭 8月10日

夏祭り&TENOHASI10周年号

夏祭り報告	2	福島から豊島へ	12
TENOHASI 10年	6	カンパ御礼	15
最近のほっと友の会	10	巻末言	16

TENOHASI 夏祭り 2013

2013年8月10日、恒例の夏祭りを行いました。

かつては南池袋公園でビンゴやゲーム大会などの催しを大々的に行っていたTENOHASI 夏祭りですが、2009年に炊き出しの場所を東池袋中央公園に移して以来、近隣に遠慮して、お昼のそうめん・この1年間に路上で亡くなった方々の慰霊祭とスイカ割りをやるくらいの「なんちゃって夏祭り」に縮小していました。しかし、今年はジャパン・イスラミック・トラスト=宗教法人・日本イスラーム文化センター：マシド大塚（大塚モスク）のみなさんが、本格パキスタン料理とたくさんのスイーツを抱えて参加して下さりました。去年のクリスマスに続いて2回目の参加です。久しぶりに祭りらしい祭りをすることができました。ありがとうございました。

参加した皆さんからも「今年の夏祭りは去年よりいいねえ」「インドネシアのかき氷って言うのはどうかなと思ったけど、じつにおいしくて有り難かった」などの声を頂きました。酷暑を乗り越えるのにふさわしい夏祭りになったでしょう。

大塚モスクの皆さんは10月第4土曜日・12月29日の炊き出しにも来てくださいます。ご支援感謝！！ 大塚モスクのアキールさんからのメッセージを掲載します。

大塚モスクの 炊き出し参加



大好評だった インドネシア風かき氷

いちごミルク風でおいしかった！！
焼き菓子・日本風かき氷も！！
おかわりを求める長い列ができました。

大塚モスクからのメッセージ

TENOHASHI の夏祭りの際には大変お世話になり有り難うございました。

私は以前から路上生活者の為に何かできないかなと考えていました。しかし、なかなか勇気もチャンスもありませんでした。

東日本大震災の後、被災地に私達が支援物資を届けたり炊き出しをしているとき、池本さんたちからTENOHASHIがいつも池袋で路上生活者のために炊き出しをしていることを聞きました。これはチャンスだと思いTENOHASHIに私たちの意向を池本さん経由で伝えていただきました。

私たちは、数多くの路上生活者がいらっしゃる池袋で行われたTENOHASHIの夏祭りに参加する事ができたことをとても幸いだと思っています。

大塚モスク近辺に住んでいる私達から見て、池袋近辺にいらっしゃる路上生活者は隣人です。私たちは隣人に誠実に接するように教えられています。預言者ムハンマドの教えの中でこんなことがあります。「もしある人の隣にご飯なしで寝ている人がいるにもかかわらず自分達だけで満腹して寝たら、そんな人はムスリムの仲間ではない」。

ですから池袋近辺の数多くの路上生活者が食べられないときは私達も満腹して眠れません。できれば毎日炊き出ししてもいいと思います。

この教えをもとにして私達は平成11年3月12日から始まって同年の8月中まで仙台、岩手、いわき市に行って炊き出しをしてきました。その時、日本の皆さんは不思議がっていました。「どうしてムスリムの人たちが炊き出しをしているのだろう」と。そして、皆さんおっしゃいました。「あなたたちの仲間を助けに来たのでしょうか」と。しかし、長く続けていると、やっと私達の気持ちがわかってもらえました。

もうすぐ寒くなります。夜も朝も冷えます。池袋近辺にいらっしゃる数多くの路上生活者は毛布も布団もない暖房設備もヒーターもない状況でどんなに大変だと思うと涙がでます。私達に何かができないでしょうか？

せめて、夜暖かいスープとナン又は暖かいチャイでもとどけられたら ！

2013/12/6

アキール シデイキ



夜は、本格カレーと
ビリヤニ（鶏炊き込み）
&チャイ。

下北沢のパキスタンレストランの皆さんが作ってくれた本格派。うまい！！



慰霊祭





そうめん配食と 生活福祉相談



TENOHASI 10年

2003年12月27日、市民団体「地球と隣のはっぴい空間池袋」＝略称TENOHASIが結成されました。それからちょうど10年。設立当初からのメンバー3人に寄稿してもらいました。

私が見たもの



代表理事 医療班

森川すいめい

*設立時〓事務局長

2001年12月31日、路上生活者への炊き出しが行われていた新宿中央公園に行ったのが私の「ホームレス」者支援の始まりだった。現場に行った理由は単純だった。たまたま見たイベント情報と好奇心。それだけだった。

広場は人でごった返していた。

誰が支援者で誰が当事者だか分からなかった。入口付近にいた人に「初めて来ました」と声を掛けると、医療テントに案内された。雰囲気心地よく、人がしつかりと繋がっていることを肌身で感じた。野宿の人たちと唱えたカウントダウンと、ほんの少しの酒と、たき火と。その後みんなで夜回りをして、食べ物を少し買ってテントで夜明けまで過ごした。その感覚をずっと大事に、あれからずっと現場に通っている。

半年が過ぎた頃、池袋でも夜回り活動をやっていると聞いたので、友人と二人で参加した。そこで新宿と池袋での活動の成果の差にショックを受けた。

新宿では、炊き出しがあつて、そこに医療班がいた。具合の悪い人がいれば医師が紹介状を持って福祉事務所に行く医療にかかることができた。しかし池袋ではそのルートがなかった。野宿状態の人たちが夜回り活動の中心にいて、数名の支援者が一緒にまわり、野宿の人たちに声掛けと福祉事務所に行こうと書かれたチラシを配っていた。しかし野宿の人たちは、「豊島区に行っても無駄だから」と言

って、どれだけ具合が悪くても病院に行こうとはしなかった。知っていた人が、一人二人と路上で死んだ。新宿に行けば医療にかかることができたが、弱っている人はこころも弱っていて、新宿に行くよりはその場所で死ぬことを待つのだと知った。会社が倒産し家族からも逃げたおっちゃん、楽しくしゃべり続けるおじいちゃん、ずっと一緒にいた内縁の夫婦、が死んだ。当時は、なぜ生活保護が受けられないのかの理由がわからなかった。

新宿のように「病气」と書けば福祉を受けられるのかとも考え、医学生だった私は公園に血圧計を持って血圧測定をし、その結果を野宿する人たちに渡した。しかし誰も福祉事務所へは行かなかった。医者を紹介状が必要なかと考え、新宿医療班に相談して池袋医療班を立ち上げることになった。当初は、紹介状を突き返されたことがあったが、さすがに医者が医療が必要だと書いたものを突き返したのは問題になり、それからは紹介状があれば福祉を受けることがスムーズになった。

立ち上がった後もたくさん仲間が集った。そして10年が経った。課題ひとつひとつにみんな向き合いながら、今の形が生まれた。かつては福祉事務



2005年冬 越冬イベントでジャンベ演奏

現実の課題は、しかし医療だけのことではなかった。制度、偏見、生い立ち、貧困ビジネス、搾取、闇金、障がい、絆の貧弱さ、国家の家族依存主義等、様々なものが重なりあつて野宿状態にその人があることを実感していった。私たちは無力だった。しっかりとした支援をしないと願って、いろいろな団体、仲間が集まって2003年にTENOHASIがたちあがった。

所とは意見が合わなくて喧嘩ばかりだったが、今は協力し合えることも多くでてきた。TENOHASIは、地球と隣のはっぴい空間池袋を英語にして頭文字をとったものだ。一人一人がはっぴいな空間に生きていけることを、それが地球上全体に広がることをみんなで目指そうと決めたところから始まった。

”わたしたち”の10年



理事 生活応援班

坂内孝雄

*設立前から炊き出しに参加

池袋の路上生活者支援がTENOHASIという名前になって10年になります。その前の話です。

自分が初めて炊き出しというものに参加したのは9・11のテロがあった2001年の冬で

す。9月11日は墓地の清掃のバイトをしていて日中とても暑かったこと、初めての炊き出しは、とても寒かった記憶がありますが、夏と冬の間は何をしていたのでしょうか。

今は無き南池袋公園（東京電力の変電所工事中）に並んだおじさんたちを見て思ったことは「日本には生活保護のような法律は無いに違いない。なぜならこんなにくさんの人が路上で暮らしているのだから」というものでした。それから多少は勉強して“その通りにやれば”皆が幸せになれるような立派な法律が日本にはあることを知りました。理想と現実の間に何が挟まっているのでしょうか？

それは他によい表現が思い浮かばないのですが“市民社会の自己欺瞞”（といって悪ければダブルスタンダード）とか“存在と意識のズレ”とか、そんなようなものが10年間でハッキリ見えてきたと思うのです。頭のよい人は最初から解っているのでしょうか自分は10年かかったということではつまらない話

で恐縮です。

難しいことではありません。1人1人が安くて早いサービスを少しずつ選択することで最終的には巨大な人員削減が起きてしまうような、あるいは他の人が住みたがるところに住みたくなることの累積が巨大な土地の格差を生むような。

私たち支援団体は都市部の劣悪な施設を貧困ビジネスという社会悪と考えて施設からアパートへという基本方針で活動してきました。ところがそのことが成功したが故に本来なら借り手がつかない劣悪物件が淘汰されずに生き延びてしまい次から次に被害者を生むということが起きています。

暗い総括になってしまいました。実際、人々の安心感を求める気持ちが生み出した絶対多数の暴挙によって今年も記憶されるべき一年でした。オリンピックによって排除と住み分けが進んでいくと、低所得者層は強い遠心力によって都市部からはじかれていくかもしれません。

後世の人の道具となり生活劣化の歯止めとなるような公的な制度を残せていないのは残念です。

原発再稼働や秘密保護法に続いて派遣労働の規制を緩和して全職種無期限で派遣を固定できるようにする案が厚労省の審議会で提出されました。

某アパレル企業は30年前から右肩上がりなんだそうですが、その店長は全員元パートさんなんだとか。

※おかげさまで自転車を新調できました。ペダルが軽くなり足腰への負担が減りました。

追記

◆生活保護制度は素晴らしいのですが他の制度とのバランスがとれていません。

特に生活保護基準額以上の年金が支給されているが怪我や病気で入院になってしまうと自治体によっては生活保護にならずに借金を背負ってしまう場合すらあります。自力で基準額前後の生活を維持して家賃も払っているワーキングプアの人々にとってはなおさら不条理でしょう。

住宅支援など間を埋める取り組みはなされていますがうまく機能しているとは言いがたい。このような事情が“私たち”の分断に拍車をかけているのです。

◆“私たち”とは支援者だけでも当事者だけでも、あるいはその2者のカップリングでもなく支援者と当事者を両極としたスペクトラムなのでしよう。

◆最近、派遣を固定する法律が通りました。

※最近の傾向としては低年齢化は当たり前前のことになり年金や遺産や土地があるのにもうまく使えない人。老々介護の実家から逃げ出してきた人。精神症状があるが治療に繋がっていない人が増えているという体感があります。

◆施設かアパートかではなく、よりよい

施設、よりよいアパートだと思います。

◆生活保護の水際作戦（申請させないで追い返す）も勢いを増して、これほど暗い予感に満ちた年の瀬は初めてかもしれません。TENOHASIや東京プロジェクトスタッフの生活も追い詰められています。



ゆるくて満たされた場



世界の医療団

中村あずさ

*設立時代表理事

10年前、またはそれより前の池袋の路上は、今にもまして悲惨な状況で、食べられず、着替えられず、差別されて、行き場がありませんでした。次々に亡くなっていく人たちをどうにもできず、ただ見送りました。

炊き出しなどの活動はいつも担い手に苦労してきていました。担い手の中心となっていた路上生活現役のおじさんたちの争いはたえず(笑)、もう次の飯は炊けないんじゃないか、と本気で思う事件?が毎度のように起こっていました。

路上生活が苦しくて抜け出さなくて、せめて布団で寝たいと願っても、それはかなえられず、襲撃されたり、追い出されたり、苦しくて悲しくて暗い気持ちになる出来事が実によく繰り返り替えられていました。

自分自身は、そんな路上での出来事に戸惑い、泣いたり怒ったり、もう立ち直れないんじゃないかな、というくらい落ち込んだりしながらも、自分のごはんも食べられないくらいに生活が苦しい路上生活現役の方たちが、限界をはるかに超えて活動を担い、これからも担う覚悟をされていることへの驚きや敬意をおぼえつつ、帰る家のある自分分は、経験も知識も力も何もないけれど、どう向き合ったらいいのか、どう向き合ったらいいのか、と考えながら、参加して行きました。

でもいつもそんな風に思いつめていたわけではなくて。

炊き出しは、路上生活現役のおじさんたちと、ぱらぱらと集まる人たちとが、昼下がりの公園でのんびり日向ぼっこしながら準備をして、いろいろ冗談言い合いながら一緒に食べる。そ

こでお互い2週間ぶりに出会えて、「生きのびられたんだね」と奇跡のようにうれしく思うというような、素朴にシンプルに「存在している」そのことだけで喜べる、ゆるくて満たされた場・関係性でした。

当時はお互いに名前をあまり名乗らなかつたしあえて聞かなかったから、名前を知らない人もたくさんいました。顔はよく見知っていました。ちなみに私は「メガネのねーちゃん」とかって呼ばれてました。

そんな関係性のおじさんたちや、学生、協力してくださる方とで、活動の行き詰まりへの危機感と、路上の凄惨な状況への怒りや焦りを共有しつつ、現実の壁にぶつかりながらも、こうだったらいのに、ああだったらいのに、という夢を、南池袋あたりにあるうどん屋さん、カフェ・ベローチェ、公園などでしょっちゅうたむろって語り合いました。そして、てのはしをつくりました。

一番盛り上がったのが「銭湯買取計画」です。計画とはいっても具体的なことは何にも考



2006,1,3 甘酒造り

えてなかつたんですが、どんどんつぶれる銭湯を路上で生活するみんなのものにしたいな。と。未だ実現していないことですが、当時の勢いをよく象徴してるエピソードだと思えます。

この場のすべての人の存在を肯定するようなムードを炊き出しのほんのひとときでも良いから共有したいな、ということや、社会的に排除されている路上の人たちの中にもものすごく大切にすべきなものがあることを本気で信じたことが、自分がてのはしを担うことを後押ししたモチベーションです。

最近のほっと友の会 ～自分の物語をつくる～

ほっと友の会コーディネーター
稲見麻里

毎月第4土曜日の炊き出しの時、公園の片隅に人の輪ができます。「池袋ほっと友の会」が行っている「お茶会」。これももう10年近く続いているTENOHASIの活動です。

今、そこはどんな場所になっているのでしょうか？開始当初からコーディネーターを務める稲見さんにレポートしてもらいました。

最近のほっと友の会は、責任をもつて関わってくれるスタッフ（わたしを含め）5人おり、安定しています。ほっと友の活動は、理念を共有できる仲間とのチームワークが要なので、この状態は、ありがたく、嬉しいことです。ほっと友は、終了後、2時間くらいかけて振り返りのミーティングをしているのですが、これも、活気があって楽しいです。30代〜50代のスタッフで、普段の職業も、保育士さん、特別支援学級の先生、高校の先生、臨床心理士（わたし）と多様です。また、ここ2年くらいは、医療班や炊き出し班の人が、ほっと友でホットコーヒーと一緒に最初に出すお茶菓子をつくつ

てきて下さることがあり、より多くの人に支えられている幸せを感じています。

現役路上生活中のIさんは「ここにくると、気持ち落ち着く、ほっとする」とよく言っていて下さいます。路上生活を余儀なくされているおじさん達が、人とのつながりを感じ、孤独から解放されて、ほっと心落ち着く時間を持つて欲しい、とはじめたほっと友ですが、わたし自身もほっと友に来ると、何か力をもらえるような感じがあります。他のスタッフも「ありのままの自分で居られる大切な場所」「心の洗濯をする場所」などと言っています。

そういつたわけで、ほっと友は、そこに集う人の心に灯りをとますような機能があることは感じ続けてきたのですが、最近、もうひとつの働きもあることに気づきました。それは、自分の（人生の）物語をつくる機能です。人というのは、自分の過去、現在、未来を、ひとつの物語のように、つながりをもったものとして捉えることができる、安定すると言われています。簡単にいうと、過去、これそれこういう人生を歩んできたから、

今のこういう自分が居て、未来はこんな具合にやっていきたいという希望を（現時点では）持っている、というようなストーリーです。その人の世界観ともいえます。これは、一度できあがったら変わらないものではなく、変わり続けていくものでもあります。

ほっともでは「最近、自分が感じたこと、考えたこと、思ったこと何でも」をテーマに、それぞれの思いを、毎月、皆でわかちあっています（たまに「初恋の思い出」とかテーマを変えれる月もあり、それはそれで面白い話が沢山です）。それなので、定期的に、ほっともに通い続けていると、自分の人生を振り返ったり、今の自分を確認したり、将来の希望に思いをはせたりする時間を持つことになりまます。そこで、物語ができあがってくるようなのです。

もちろん、今の自分の辛さを感じるだけで、精一杯の人はいま。特に、路上生活中の方は。それはそれで、今の気持ちを吐き出し、皆に受け止められることで、少し楽になる部分があるので、大切なことです。路上で寝ている時に、暴行を受けた、

と怒りで身体をふるわせながら語られた方も居ました。そういつた方も、生活保護を受給することになり、とりあえずの衣食住が確保されると、少し余裕が出てくるようで、ご自分の物語を語られるようになっていきます。

そして、グループの豊かなところは、それを仲間で共有できるところではないか、という気がします。同時に、他の人の話も聞けるので、そこから自分が忘れていたような過去のエピソードを思い出す人もいます。「大切な人、または物」というテーマで分かち合った時、はじめは「ずっといじめられて、ひとりだった。大切な人も物もない」と話したおじさんがいました。ところが他の人の話（ドラマチックなものからささやかなもので）を聞いているうちに、小さい頃、自分に親切にしてくれた近所のおばさんがいた、ということを思い出した、ということがありました。いじめられてばかりいた子ども時代にも、親切にしてくれた人はいた、という認識の変化は、この方の物語を小さく変える力があったのではないかと思っています。

最近、ほっともに参加するようになったAさんは、初めて参加された時「今までの人生には後悔しかない。だから、後半の人生は、悔いがないように生きていきたい」と、切実な雰囲気でも語られていました。現在50歳前後で、私たちが最初にお会いしたときには路上生活中だったようで、着ている服はくたびれており、余裕がなく陰しく暗い表情をされていました。ところが、3回目にほっと友に参加して下さった時には、やはり「今までの人生は後悔しないので、これからは悔いがないように生きたい」と同じことをおっしゃっていました。生活保護を受けられたのか、こざっぱりとした身なりをし、せっぱつまった雰囲気なくなっていました。そして、今まで建築現場で働いてきたこと、そこで行き詰まっていたので、これからは建築現場以外の場所で働きたいと思っていること。将来のことを思っって不安になる時は、瞑想をするようにしていることなどを話して下さいました。

先月は、「ほっともに行ったら」何を話そうか、1ヶ月ずつと考えていた」といいます。知

性的な雰囲気もあるAさんのことなので、きつと、1ヶ月、様々なことを振り返ったり考えたりにして過ごしていたのでしよう。あせらず、ゆっくり、ご自分の居場所や生活を築いていっていただきたいと願っています。そのひとつに、ほっと友があれば嬉しいことです。

Aさんは「ここ（ほっとも）」

過去の物語にも、変化が訪れるかもしれない。そんなAさんの分かち合いを聞いてみると、わたしも、自分の人生をしつかり頑張らなきゃ！と襟を正される思いがします。そんな最近のほっと友の会です。



に通い続けることで、自分がどう変化していくのか、楽しみで「ともおっしゃっています。ほっともの場所をそんなふうに感じられるAさんの感性は素敵です。いつか「後悔しかない」

福島から豊島へ

福島から自主避難してきた人が東池袋中央公園で野宿しているという話は去年から聞いていました。会ってみた佐藤恵（けい）さんは優しい笑顔の快活な男性。TENOHASIの手伝いをしてきているうちに、みんなから頼られて、いつの間にかシェルターのお世話係みみたいな立場になっていました。なぜ福島から豊島へ?? 念願かなって佐藤さんにインタビューできました。

生い立ちですか、そうですね
 ・・・福島市で小中高と過ごし、
 ジェットコースターの設計をや
 りたいと思って大学は郡山の日
 理学部に行きました。そこで
 光工学に出会い、キャノンの福
 島開発チームに就職しました。
 しかし、母が骨粗鬆症と診断を
 受け、父は先に亡くなっていた
 ので、一人っ子の自分が病院の
 付き添いなどに行くことが多く
 なったためキャノンを辞め、祖
 母のいる南相馬の母の実家に引
 つ越したんです。南相馬では、一
 階をバリアフリーにリフォーム
 して、地元で働きました。しか
 し、急に病院に行つて仕事に穴
 を開けることも多かったので、
 いろいろなお仕事をしましたね。
 2001年に祖母が亡くなり、
 母も悪化して完全に車いす生活
 になりました。そのころ彼女も
 いたのですがこの生活に引きず
 り込んではいけな思つて結
 婚はせず、介護と仕事に明け暮
 れていました。
 そして、2011年の3月1
 日14時46分。勤めていた
 小さな材木店から自転車を買
 物に行く途中でした。一緒に働
 いているおばちゃんに頼まれた
 3時のおやつのお団子と、社長

の奥さんから頼まれた文具を、
 セブンイレブンに買いに行こう
 としていた時です。あれ、めま
 いがする、と思つたらそのまま
 自転車ごと倒れ、腕時計はピン
 が抜けてその時刻で止まってし
 まいました。今しているこれで
 す。見上げると電線が揺れ、地
 面には地割れが走り、家が崩壊
 していました。



近くから女の子の鳴き声が聞
 こえました。ブロック塀が車に
 倒れてできた小さな隙間に、女
 子の子が挟まっていたのです。た
 すけなきや、と思ひ、「火事場
 の馬鹿力」という奴で、材木を
 梃子にして左腕でブロック塀を
 持ち上げ、右手で女の子を引つ
 張り出したその瞬間に左腕に異
 変を感じ、「あ、折れた」とわ
 かりました。上腕骨が2本とも
 折れていました。でも痛みは感
 じなかつたです。

女の子の名前に聞いたなら「み
 く」といいました。「よし、お
 兄ちゃんで行こう」・・・もう
 お兄ちゃんという歳ではないん
 ですが・・・といつて歩き出すと、
 少し先から「助けてくれ」とい
 う声が聞こえました。1階が崩
 壊した家の2階でおいちゃん
 おばあちゃんが叫んでいました。
 みくちゃんをその場で待たせ、
 がれきを乗り越え、どうにか2
 階へ。しかし、左手がダメにな
 っているので抱き下ろせません。
 シャツやタオルケットをつない
 で柱に結び、それを命綱にして
 自分で下りてもらいました。そ
 してみくちゃんと合流した時、
 初めて津波警報が耳に入りました。
 それまでは鳴つていても気
 がつかなくつたのでしよう。1
 00mくらい先に波の先端が見
 えました。

「母は車いすだから命はない
 な、8年つきあつた彼女が近く
 だから助けてくれるかな、いや、
 無理かな」と思ひながら高台に
 走りました。みくちゃんを右手
 で抱え、悲惨な情景を見せない
 ようにコートで覆つて。

公民館に入つて、おじいさん
 たちと別れ、自分とみくちゃん
 の名前を避難者名簿に書きまし

た。母と彼女のことは気になりましたが、みくちゃんを置いて探しに行くわけにはいかなかった。たので。

14日の朝8時「〇〇みくという子は・・・」「います」という声が聞こえました。それまで泣くこともなく我慢してたみくちゃんが「ママ」と走っていききました。お母さんに、お礼を言われました。でも、そこにお父さんがいなかったのは、お母さんと手分けして探していたのか、それとも・・・みくちゃんの名前は「未来」と書くそうです。未来が開けてくれるといいなと思いました。

みくちゃんを別れたので、小学校の体育館に設けられた遺体安置所に向かいました。遺体は段ボールの上に寝かされていていました。顔が見えないように上にも段ボールが掛けられ、手足の先だけが見えました。端から1人ずつ確認して下さいと言われていたので、母でないと思われる人も、顔を見て、合掌しました。6体目が母でした。涙が止まらないまま「佐藤かず子 確認者 佐藤恵」と書きました。

それから3体目が彼女でした。「藤井ゆみこ 確認者 佐藤恵」

と署名しました。

2人は、合同の火葬日に焼いてもらいました。

ちなみに、左腕の骨折ですが、その当時、被災地の病院はどこも大混乱でとても自分程度が治療を受けられるような状況ではなく、自分で添え木を当てて治しました。そのため変な形についてしまい、今も左腕は曲がったままです。

彼女の遺骨をすぐに釜石市平田にある彼女の実家に届けたかったのですが、道は寸断されていたので、ようやく行けたのは5月下旬でした。平田地区は津波に流されて跡形もなく、彼女の家族は1人として見つかっていませんでした。

遺骨を釜石市役所に預けて、そのまま復興作業や炊き出しの手伝いをしながら南下。大船渡ではサッカーの小笠原満男選手が開いたサッカー教室を手伝いました。私も学生時代にサッカーをやっていたので。

宮城に入って松島・名取・気仙沼と移動し、福島に戻ったのが翌年の2月。

南相馬の実家は福島第一原発から12キロ圏だったので入ることが出来ず待機と言うことに

なりました。

ところが行った仮設住宅は阪神淡路大震災の時に使ったというすきま風の入るひどいもの。フアミリー向けの仮設住宅に、縁もゆかりもないおばあちゃんを2人入れたりにいるから、おばあちゃんは仮設にしばらくおぼあちやんは仮設にしばらくおぼあちやんと公民館で過ごし、寝る時だけ帰ったりしている。おじいちゃんたちが入ったところではテレビが1つしかないから、一番強い人がチャンネルを握ったり。せめてテレビは1人1台にしてイアホンで聞くとかできないのか？莫大な復興予算が組まれて、義援金も集まっているのに、必要な人に届いていない。

そのときは民主党政権だったから、小沢一郎さんに会いに盛岡に行った。面会を申し込んだが門前払いにありました。

ちやうど東京都知事選の前で、せっかく東京都が被災地のがれきを受け入れてくれたのに、結果によってはなくなるかもしれないと思って、嘆願書をもって東京。2012年9月21日に東京に着きました・・・バスを下りるところを間違えてデイズニールランドまで行ってしまったんですが・・・都庁に行って聞いて

たら「副知事だった猪瀬さんなら続けると思いますが、他の人だったらわかりません」と。

アポ無しで各政党をまわり、嘆願書を手渡したのですが、はかばかしい反応がありません。毎週金曜日のデモにも参加したけれど、マスコミは取り上げないし、政治も動かない。

これからどうしようかと思っていた頃、TENOHASIに会いました。実は新宿区役所で「福島から避難してきました。どこか頼れるところはありますか」と相談したんですが、「豊島の方がいい」と言われ、豊島区に行つたんです。豊島と言つたらサンシャインしか知らないから行つてみたら、たまたまその日が9月の第4土曜日で、東池袋中央公園で炊き出しをやっていたんです。「避難者向けの炊き出しかな」と思って聞いたから、「路上生活の人のための炊き出し」と教えてくれました。「ほんでですか？」という話をしたのですが、それが公園のテント村に住むYさんたちだったんですね。

ホテル住まいをやめて公園で野宿するようになった10月の

第2土曜日、Yさんから坂内さんの耳に入り、「よかつたら食べませんか。服もあります」と言ってくれました。それが坂内さんとの出会いです。

その頃は、鍼灸班のテントを石崎さんと女性たちだけで設営していたので、片付けを手伝うようになりました。越冬ではEさんに「餅つき手伝え！」と言われて初めてボトムへ。

今年の2月からはおにぎり作りも手伝うようになったんですが、泊まっていた当事者のIさんがすごくなついてくれたんですね。

そして8月のある夜、公園で寝ていたらIさんが来て「Sさん、大変なんだよ、ケツふくペーパーがないんだよ」と言うんです。「そうか、それは大変だね」って、コンビニで買って持っていった行ってみたら、ボトムのトイレの棚にあるんですよ。「あるじゃないの」と言ったら「高くて取れないんだよ」。たしかにIさんは背が低いけど、他の誰かが気付かないのかね、と聞いたら「そんなやついない」。しょうがないから百円ショップでトイレの床に置く置き代を買いました。そしたらその

話が坂内さんに伝わったようで「しばらくIさんと一緒にいてくれませんか」と言われたんです。それでボトムに泊まることになったんですが、僕がいなくなるよとIさん不安になっちゃうのでべったり一緒にいないといけないようになって。Iさんはナイーブだからボトムに新しい人が入るとパニックになって明け方まで帰ってこないこともありました。

11月に、Iさんが、TENOHASIと連携する福祉団体のゲストハウスに移ることになり「支援員として一緒に入ってもらいたい」と言われたんですね。私も気が滅入っていた頃だったので、自分がいることで誰かが笑顔になってくれるなら、と思って引き受けました。

給料？ いや、寝るところとご飯はお世話になってるけどお金はもらっていません。支援する人とされる人という壁ができるのが嫌なんです。お金が必要なときは自分の蓄えでまかなっています。

この間も、福島出身の仲間と東京都のがれき処理の手伝いをボランティアでしたり、南相馬

に野菜を送る活動などをしながら、今後のことを模索しました。

将来ですか？いつかは福島の南相馬に戻りたいです。でも、帰れません。帰れるのは30年後とか言われています。そして75ですよ。せめて2020年までは生きてオリンピックで変わる東京を見ようとか冗談言ってますけど。

彼女とは、2012年のロンドンオリンピックに行ってロンドンの教会で式を挙げようというプランもありました。

勤めていた材木店の人6人はみな遺体になったか行方不明のままです。

南相馬にいたおばさんとその子ども3人も見つかっていません。

本当は相続の手続きなんかもしないといけないんです。でも、先の短い人や子どもがいる人も多いから、弁護士さんに言って、自分は後回しにしてもらってます。

避難者への補償？最初にもらったわずかな額だけです。莫大な義援金が被災者に払われず、ストックされ、訳のわからぬところに金が回っています。避難

所ではみんなこう言っていました「俺たちが死ぬのを待ってるだけだっぺ」。

楽天が優勝して、あまちゃん がブームになって東北が盛り上がってよかったです。でも、避難者にアンケートを採ったら、帰郷を諦めて東京に住みたい人が44%なんです。誰のための復興なんでしょう。

TENOHASIに言いたいことですか。そうですね、ほんとによくしてくれます。ただ困っている人をボトムに入れたときに、もうちよつとその人たちにみんなが目を向けてくれると安心です。今は水曜土曜が一般開放で「洗濯機やお風呂を使えますよ」と宣伝しているけれど、昼にいくと、ボトム滞在者がまだ寝ていたりする。「いらつしやいと言われて来たけど、まだ寝てるじゃん」だと初めての人は帰っちゃう。そのときどきの責任者がいてその辺のルールを作ってもらえるといい。監視になるといけないけれど。

TENOHASIの人たちがもつとボトムに関心を持ってもらえるといいです。

個人情報保護のため
WEB版では寄付者のお
名前を割愛しています。

資金・物資のカンパありがとうございました

2013年8月1日～2013年12月10日 敬称略・順不同

* 事務局の手違いでお名前が漏れている方がいらしたら、ご連絡ください。

TENOHASIは、みなさまに支えられています。

卷末言 最近の TENOHASI 10年目のTENOHASI

いつも理事3人が回り持ちで書いている巻頭言ですが、今回は編集最終段階で巻頭に挿入しようとしたら、その後ろのレイアウトが全て崩れてしまうことが判明！

やむなく巻末になってしまいました・・・とほほ。

by 事務局長 清野賢司

ご支援くださる皆様、いつもありがとうございます。

今年もどうにか越年越冬活動をはじめのまでにこぎ着けました。最近の様子をご報告したいと思います。

最近のてのはし

① 炊き出し

○並ばれる人数減

毎月2回の炊き出しに並ばれた方の数は4月から11月までの平均が約240人。昨年同期は275人だったので、リーマンショック以来続いてきた高止まりからやっと減少に転じたのではないかと期待しています。

各支援団体の努力で、生活保護や就労につながった方が増えたことがその一因であることは間違いのないと思います。景気回復の影響と言えるものはまだ感じられません。震災復興の公共工事で多くの人が東北に行きました。しかし、「使えない」労働者はつぎつぎに首を切られ、仙台

などで路上生活になり、東京に還流しているという報告もあります。

② 夜回り

△野宿者は変わらず

毎週の夜回りでは、池袋駅とその周辺で野宿されている片野一をカウントしています。その一は平均約110人で、昨年同期とほとんど変わりません。炊き出しに並ばれた人が減っているのに不思議なことです。

③ ボランティア

○増加

昨年12月のホームページリニューアルの効果が大きく、ボランティア参加者は飛躍的に増えました。昨年は炊き出し参加者平均が約65人でしたが、今年度は80名を超え、100人を超した日もありました。おかげさまで、調理班の参加者が少なくて青ざめると言うことがほとんどなくなりました。皆さんありがとうございます。

④ HP 経由の支援要請

× 激増

ホームページリニューアルのもう一つの効果と言えるのが、メールや電話での支援要請が増したことです。

「家がなくて、住む所がありません。どうしたら、いいかわかりません。話し聞いてください。電話番号は、〇〇です。よろしく願いましたます」
「一部上場企業に勤めていたますが、精神障がいを発症して、



今はある地方の施設にいます。職員は障がいには理解がなくて、通院もままなりません。ここには悪くなりばかりです。東京に出ていい病院に通えるようにしてもらえませんか」

「東京で勤めていましたが、鬱とパニック障害を発症して北関東の実家に戻りました。高齢の両親は働けない私を理解できず、いつも辛く当たります。実家を出て東京に戻りたいのですが、どうしたらいいでしょうか」

こういったメール・電話での相談は、前は年に数件でした。最近ではほとんど毎週。ネットカフェやスマホから支援情報を検索して連絡してくる若い方が大部分です。

⑤ 財政 △小康状態

福祉医療機構からの助成金が昨年度で打ち切りになり、この春、みなさまに「財政危機 SOS」を出しました。それに対して多くの方が昨年を上回る寄付をしてくださり、何件かの大口寄付もあって、どうにか今年も乗り切るめどがついてきました。

本当に本当にありがとうございます。これほどたくさんのおみなさまからの貴重な寄付を頂いていることを思うと身の引き締まる思いです。

また、外資系金融機関の皆さんが運営するFITチャリティランの寄付先団体選ばれ、来春には多額の寄付金をいただけることになりました。この資金で、生活応援活動スタッフを正規職員として雇用する準備を進めています。

⑥ 生活応援活動

× 危機的状態

路上から脱したい方をシェルターにお泊めして、公的支援につなげ、その後の安定した地域生活につなげるまでの応援を行う活動です。TENOHASIは、特に「路上生活状態にある障がい者」支援を世界の医療団・浦河べてるの家と共に行っているところに特色があります。しかし、ここがTENOHASIの一番の弱点でもあります。炊き出しには毎回80人も人が参加しているのに、生活応援

活動はフルに動けるスタッフが坂内孝雄の一人だけ、シェルターの管理運営・個別の対人支援を行うパートタイムスタッフがほんの数人しかいません。そのため支援が行き届かなくて生活が破綻・失踪してしまう人が相次ぎ、スタッフは常に「燃え尽き」の危機にさらされています。スタッフの増員は急務で、来春まで待てない！というのが実感です。

⑥ 事務局

× もう一つの弱点

もう一つの弱点が、事務局です。

会計・渉外・広報などを担っているのは事務局長の清野賢司を中心としたほんの数人のボランティアです。みなそれぞれ自分の仕事を持っていて、じっくりと事務に取り組むことが難しく、寄付してくださった皆さんへの御礼状や領収書の発送・会計事務などが遅れ遅れになり、みなさまにはご迷惑をおかけしています。

将来、正規雇用のスタッフを増員すること、寄付金が税控除

の対象となる認定NPO法人になることを目指しています。その基盤となる事務局スタッフを確保しないとどうにもなりません。雇用スタッフはメインの活動である生活応援活動に投入せざるをえないので、ボランティアかパートタイマーで、認定を取れるだけの事務局体制をつくれるかがTENOHASIの将来を左右します。



十年目のてのはし

生存の支援から 生活の支援へ

この10年でTENOHASIの何が変わったか、を一言でいうと、「生存の支援から、生活の支援へ」となるでしょう。

創立メンバーの項にあるように、TENOHASIは炊き出しと医療相談をする団体として発足しました。2週に一度の炊き出しは、命をつなぐ食を提供すると共に、お互いの「生存」を確かめ合う場でもありました。

「ホームレス」に対する差別偏見は今よりもはるかに強く、生活保護は門前払いが当然。若者による襲撃事件は頻発し、「ホームレスの支援活動をしている」と話せば「どうしてあんな怠け者を支援なんかするんだ。だから甘えるんだよ」と怒鳴られることもしばしばでした。

当時は 金も人もなく、炊き

出しは路上生活当事者を中心とする20名程度のボランティア

アで回っていました。夜回りはできる人がいなくなつて一時休止。2005年の冬には炊き出しもやめて解散か？という危機も迎えました。

ですから、その頃は、まず生き残ること、疲れたら寮（緊急一時保護センター）に入つて休むこと・アルミ缶や日雇いの仕事もできなくなつたらどうにか生活保護につなげることで、これがTENOHASIの活動の全てでした。寮や生活保護につながつた人数が、「路上生活から脱出した人」の数としてカウントされていきました。

しかし、「路上生活から脱出した」はずの方が、かなりの確率で路上に戻ってきました。就職したけれど、あまりの過重労働といじめでやめてきた人がいました。生活保護をもらつて入った貧困ビジネスの施設でひどい扱いを受けて逃げてきた人がいました。病院に入院したのに、そこで厄介者扱いされて自分から出てきた人がいました。

そんな人の中に、そもそも人間関係が作りづらい人や、制度の仕組みが理解できない人がたくさんいらつしやいました。

路上生活者の中に、たくさんの方がいることを発見したのがその時です。

知的・精神的な障がいを抱えながらつらい路上生活をおくっている方々にとつて、生活保護はゴールではなく、新たな苦難の旅路のスタートでしかなかつたのです。

アパートに入ったけれど、一人ではきちんとした服薬ができず、病状が悪化して大声でわめきちらし、近隣から追い出しを食らっている人。

飲まなければいい人なのに、一人でいると飲まずにいられなくて、飲んで暴れてしまう人。認知症が進んで、食事も取らず、風呂にも入らず、最後は自分の家に帰れなくなってしまう人。

一人でいると幻覚幻聴が出て苦しくてたまらない人。辛くないってリストカットが止まらない人・・・

様々な方に関わっているうちに

に、「ホームレス」支援をしていたつもりだったのに、それが「一人暮らしの老人」や「家族のいない知的障がい者・精神障がい者」の支援と地続きであることを発見しました。

目の前にいる人を、どうにかしたい、と思つて夢中で活動してきました。しかし、10年目を迎え、安定した公的支援もなく、皆さんからのカンパだけに頼る綱渡りの運営をつづけることに限界も感じるようになってきました。

私たちTENOHASIスタッフも、かなりの人が自分も障害を抱えているか、家族に障がい者をかかえた「当事者」です。また、このそういう人たちが生きづらさを増しているこの社会を構成しているという意味では、皆さんの全てが「当事者」でもあります。

ぜひ、これからも共に歩んでいただきますようお願い申し上げます。

はっぴいめーかー大募集

□ ボランティア募集中

○生活応援活動 主に平日の日中

生活保護申請の同行・入院者へのお見舞いなど

○炊き出し 毎月第2/第4土曜日

調理班（*文京区のお寺集合） 11:00～18:00

非公開ですのでメールや電話でお問い合わせ下さい

公園班（東池袋中央公園集合） 16:40～20:30ごろ

鍼灸・マッサージ 17:00～19:00

医療相談 生活福祉相談 18:00～19:30

ほっと友の会（お茶会・第4土曜日のみ） 16:30～19:00

○おにぎり配布と夜回り

毎週水曜日（池袋駅前公園集合） 21:30～22:30

TENOHASIのボランティアは

アポなし・参加できる時間だけ・1回だけでもOKです。

□ 活動資金カンパをおねがいします！！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人TENOHASI

振込 ゆうちょ銀行 019(セロイキユウ)支店 当座 259686 トクヒ)テノハシ

□ 物資カンパも大募集中！！

衣類（これからは冬春物を。スーツと女性ものは不要）・靴・毛布

食材（米・缶詰など）

【送り先】〒177-0045 練馬区石神井台6-1-28 清野賢司 TEL090-1611-1970

（夜間指定でお願いします）

お問い合わせは

メール：TENOHASIのホームページの「お問い合わせ」から

電話：090-1611-1970(事務局長 清野賢司 平日は18時以降)

特定非営利活動法人TENOHASI

会報第27号

2013/12/21発行

□ ホームページ <http://tenohasi.org/>

□ メール tenohasi@yahoo.co.jp

発送元：TENOHASI事務局

〒177-0045

練馬区石神井台6-1-28 清野方

NPO法人TENOHASI

TEL 090-1611-1970

（事務局長 清野賢司）

